
しあわせ村 物語

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせ村 物語

【Nコード】

N4192A

【作者名】

サイキアスカ

【あらすじ】

ランは「しあわせ村」に引っ越してきた！この村は自然がいっぱいだけど、ハイテクな技術があちこちに！いろんなことが起きる「しあわせ村」でランが大活躍！

第一物語・しあわせ村（前書き）

ザー　ザー　ザー雨の中タクシーは走り続ける。

第一物語・しあわせ村

冬。大雨の中、タクシーが走っていた。

中には運転手と9歳くらいの少女。

「譲ちゃん、名前なんて言うんだ？」

「「ラン」です」

少女は答えた。

「ランか・ランって花言葉知ってるか？確か・・・美人だったよ
うな」

「そうなんですか」

ランは、眼を大きくした。

「ところで、ランちゃん。どこへ行くんだっけ？」

「えっと・・・「しあわせ村」です」

「しあわせ村か・・・あそこはいいところだよ・・・ランちゃん
はあそこのどこが気に入ったんだ？」

運転手は雨だというのに、後ろを向いて話した。

「え・・・やっぱり、海・・・とか？」

「海か？そうかそうか。やっぱりな」

そう言くと、運転手は前に体を向け、運転をした。

「おっ、そろそろ「しあわせ村」に着くぞ。ちようど雨も上がって
きたところだし・・・」

『しあわせ村へようこそ！』と看板に書いてあった。

キキー！

ブレーキ音が鳴り、タクシーは停車した。

ボタンと、タクシーのドアが開く。

ランはイキオイよく飛び出す。

「わあああっ！」

ランは辺りを見回し、感性の声を上げた。

あたり一面は、雪景色。

木がいっぱいあって、その上にも雪が乗っかっている。でも、梨が生っている。

「おい。役場はそこだから、話しっかり聞いて早くこの村に慣れるんだぞ！」

「はい！」

「それじゃあ、また！」

そう言って、運転手はどこかへ去っていった。

ランは、真後ろにあった役場のドアを開けた。

カラン・コロンとドアにつけてあった、鐘が鳴る。

「いらつしやい。えつと・ランさんね。こちらですよ」

受付の人が、柔らかな微笑を浮かべて、手招きする。

ランは、二つのコーナーがある机の左側へ向かった。

右側は、手紙のマークが書いてあるマツトがしいてある。

「改めていらつしやい。ようこそ「しあわせ村」へ。まずしあわせ村について少しお話をします。この村は小さい村です。そして、人数も多すぎでは困るので、最大8人しかこの村にはすめません。ちなみに、あなたとお客様の方々以外の方はランダムに引っ越ししたりします。では、まずあなたのおうちへいつてください。えつと・

「役場のお姉さんは、近くにあった箱を探り出す。

だが、目的のものが見つからないのか、後ろのほうまで行く。そして、最終的に、

「村長さん！地図はどこにあります？」

「地図？それならここじゃ」

40代前半の「村長」と呼ばれた優しそうな男が、立ち上がりお姉さんに箱を渡す。

「ああ、ありがとうございます」

お姉さんは、ランに箱の中身を渡した。

「はい」

ランは手のひらサイズの、機械を渡された。

「それは、村の地図・日時・道具・お金・友達リスト・電話機能・他多数が入っている、機械。『楽々携帯機械』略して『R・K・K』です！」

「あ．．R・K・K．．ですか？」

「そうよ。そこに個人設定を入力するアイコンが出てるでしょう？それをタッチして．．ペンは後ろについているわ。それで、名前・性別・誕生日・好きな色・好きな音楽のジャンル・好きな食べ物を入力するの」

「．．．．？」

意味が分からないまま、入力していくラン。

すべてが終わったとき、鐘が鳴った。

「ありがとう。この鐘は五時の合図なの。この後、センリさんに頼まれてランさんをお店に連れてくるよう頼まれているの」

お姉さんはそう言っ、さっきランが入力したデータをパソコンに移し返した。

「村長！ここまで終わりました。後は、帰ってからやります」

「OK・早く行ってきなさい」

「はい」

そして、ランはお姉さんに連れられて、センリという男の店に行くことになった。

第一物語・しあわせ村（後書き）

騒がしい、村の生活！ランはどうなる！？

手伝い・友達（前書き）

お姉さんに連れられ、センリの店へと向かうラン！

手伝い・友達

センリという男の店に行くことになったラン。

センリの店は、小さいボロボロの店であった。

だが、一応品揃えはある。といっても、7〜8個だが。

「おうっ！いらっしやい・・・ってオマエがランか。うっす！オレがセンリだ」

「あっ・・・ど・どうも。ランです・」

ランは軽く会釈をする。

「なんだなんだ！？覇気がないぞ覇気が！」

「あなたが、ありすぎるんです！」

お姉さんが、突っ込む。

「なんだ？ルーナ、よくオレに突っ込めたな」

「はあ~~~~？馬鹿じゃないですか？それよりさっさと説明してあげてくださいよ」

「おうっ、えつとな、オマエは今、まさに持ち金0円！そうだろ？」

「は・・・はあ」

「ということで決定！オレの仕事を今日だけ手伝え！バイトだバイト！」

ランはあまりの声の大きさに耳を塞ぎたくなるようだったが、まあ我慢した。

「じゃっ、まずこれに着替えろ！せっかくの服が汚れちつては、ダメだ！」

「えつと・・・？」

センリから渡されたのは、服の絵が描いてあるカードであった。

「これはね、R・K・Kにスライドさせるの。ほらそこの、溝に」

「ああ・・・」

ランはうなずいて、カードをスライドさせる。

すると、あっという間に、今までのワンピースが作業着になる。

「わおっ・・・」

「よし、着替えたな！では早速一つ目！この花の種・木の苗を植えてきてくれ！」

「またもや、花の種が書かれたカードが10枚と、木の苗が書かれたカード5枚が渡される。」

「これはね、スライドさせた後、植えたい場所にこのカメラを向けるの。それで「OK」ボタンを押す！するとそこには、花の種が埋まっている！いつきに何枚もスライドさせても、メニューボタンで植えたいものを押せばできるからね。カードはスライドさせた後、消えるから」

「そう言ってお姉さんは、見送ってくれた。」

「えっと・・・どこに植えようかな？」

「ランはいろいろ見た後、どこに植えるかなどを決めて、カードをスライドさせた。」

「なるほど、確かにカードが消えた。」

「そして、カメラを向け「OK」ボタンを押す。」

「シュツ、と花の種が埋まった。」

「おお・・・ハイテクってやつですか？」

「ランは次々に植え、店に戻っていった。」

「早いな！じゃあ次は、配達だ！これは体力の問題だ！この家具を「レイン」にもっていつてくれ！分からなかったら、「村の人」ってアイコンを押せばわかる！現在地もな！」

「あ・・・ありがとう！」

「おっ、覇気だ覇気！その調子だ！」

「じゃあいつてきます！」

「おうよっ！」

「ランはそう言つと、もうダッシュで「レイン」の元へ行つた。」

「村の人」というアイコンを押すと確かに、8人の顔が映つた。」

「レイン・レイン・レイン・レイン・あつた！」

「・・・友達になれるかしら？」

レインはそう言って、柔らかく笑った。

手伝い・友達（後書き）

新しい友達^ができた！

手伝い終わり・新たな友達（前書き）

レインと友達（？）になった。ランでした。

手伝い終わり・新たな友達

「・・・お友達になれるかしら？」

レインは、微笑んだ。

「ただいまです！」

「おうよっ！どーだったか？」

「バッチリでしたよ！」

「そうかそうか。じゃあ、次はこの荷物をキイルに！」

「はい！」

ランはカードを受け取り、また走り出した。

また、「村の人」のアイコンで探し出す。

今度はすぐ見つかった。

男で、歳は何気に同じ。

まあまあ美形であつた。

しかし、今キイルがいるのは村の端の大木の上であつた。

しかも、今入る場所と真逆の方向。

「え〜〜〜〜・・・」

ランは不満を漏らしながらも人間離れした体力と運動神経で走り出した。

キイルは、今、大物を釣り上げようと頑張っていた。

もちろん、つれるわけは無いが、頑張っている。

髪・瞳と同じ色のこげ茶で、背はランより少しだけ大きい。

こげ茶の瞳で水面を見ている。

ピクッ、ピクピクッ！と、浮きが沈んだ。

「！」

キイルは、チャンスを狙って、引き上げた。

「いっけえええええええええっつ！」

00円だ」

「わーい！ありがとうございまーす」

ランは貰った、カードをスライドさせる。

そして、今の持ち金がやつと「35000円」になった。

ボタン、ドアが閉まる。

その瞬間。

「きゃ

！！終わったあああああ！！」

叫んだ。

あらん限りと叫んだ。

「ふゝゝまずどこ行こうかな？」

ランは辺りを見回した。

すると、横には「仕立て屋」があった。

「ゝゝまず、服を着替えよう！」

そう思い、ランは中に入って行った。

カラリン

軽快な鈴が鳴り、ドアが開いた。

中には、明るい音楽が流れている。

「いらっしゃーい！Y・I・Hへ！」

また変な名前が。

一瞬声に出しそうだったが、のどに押し込んだ。

「今日はゝゝゝって、初めての人か！ごめんね。ここはY・I・

H！「安い・いい品・豊富」なみせだよーん！」

確かに、安い・いい品・豊富だけど、その名前は無いだろう。

またもや、出てきそうだったが、また喉に押し戻した。

「で？今日はどんなのが？」

「えっとゝ動きやすいの」

「OKゝゝえっとゝあったあった！この質問に答えていってね！」

ランに渡されたのは、薄いモニターであった。

質問・1好きな色は？ A・青

質問・2好きな柄は？ A・ストライプ

質問・3ワンピースか上と下で別れている服どちらが好き？ A・
後者

質問・4長袖が微妙か半そでか袖なしどれがいい？ A・微妙

質問・5キツイのがいいか、ぶかぶかどっち？ A・ぶかぶか

質問・6ズボンとスカートとケロットどれがいい？ A・ケロット

・
・
・

なんか変わった質問だな〜．．．と思いながらも、ランは質問に答えて言った。

すべてが終わったとき、奥で作業していた人に、カードを渡された。
「はい！これがあなたの、服よ！ぜひ着てね！」

ランはスライドさせて見る。

すると、青色の脇に水色のストライプが入った、ちよつと大き目の微妙な袖のシャツ（丈が異様に長い）に、膝までの柔らかいジーンズのズボン・なぜか青いスニーカーまで付いている。

「わあっ！可愛い！オマケに、この青いリボン・あげる！」

ランの腰まである薄い水色の長い髪を、左右両サイドで結ぶ。

「やっぱし、かわいい！」

店員さんは、店内を駆け回り、「可愛い」と叫ぶ。

もうひとりの店員さんが、今のうちにといいことで外に出してくれた。

外はもう夕方であった。

月が見えてきた。

「きれ．．．」

ランはそう言葉を漏らす。
そして、ランは家に戻っていった。

手伝い終わり・新たな友達（後書き）

こんにちわ。 やつと第三話（一応、第一物語の第三部）です。これから頑張りますのでよろしくお願いします！

予定・嘘・薬（前書き）

ぽちゃんっ・・

浮きが水の中に一回沈んで、また浮き上がる。

「大物釣れるか？」

陽気な声でした。

予定・嘘・薬

月が綺麗な夜。

ランは帰っていった。

翌朝。

ちちちつ、と小鳥の鳴き声が聞こえる。

むくつ、とランは起き上がり、大きなあくびをする。

「ふあああああ・・・今何時？」

問いかけるが、返事は返ってこない。

「・・・あつ、そうか。えっと・・・時計・・・無いんだったじゃあ・・・」

ランはそう言つて、鉛筆と紙を取り出した。

「今日の予定。必要最低限のものを揃える！村の人たちに挨拶をしに行く！」

ランは予定を立てると、すぐさまベッドの上から降り、髪を結ぶ。

そして、洗面所にいく・・・が。

「あ・・・あれえ？」

どこをどうしても、洗面所が見つからない。

水道管はあるのだが。

「・・・まっ、いつか。川に行こ！」

ランは、タオルを持って外へ出た。

さらさらさらさら・・・と川は流れている。

「わあっ・・・」

ランはしばらく見とれていたが、地面に膝を着いて顔を洗った。

洗い終わったところで、タオルで顔を拭く。

「ふっつ！気持ちよかった・・・あつ、もうこんな時間！」

ランは日が昇ってきたので、急いで家に帰り着替えなどを済ませた。

食事は、生っている梨を食べた。

甘くて、シャリシャリとてもとてもおいしい。

昨日作ってもらった、服を着る。

さつきは軽く縛っていた、髪をしっかり結ぶ。

すべての準備が出来、外へ出ようとしたところ。

トントント、とドアがノックされた。

「はい？」

「・・・あの・・・レインです。朝早くすみません」

「？レインさん？」

ランは、家のドアを開ける。

そこには、綺麗な服に身を包まれた、レインがいた。

「どうしたの？レインさん？」

「あつ・・・さん」付けはしないでください。では無く、「お友達」
になつてくださりませんか？嫌であれば別にかまいませんけど」

「いえ、別に大丈夫ですけど？」

「それはよかった。そうです、その証にコレ・・・「洗面台」をどうぞ。
わざわざ、川まで行くのは大変でしょう？」

レインはそう言つて、ウインクをした。

・・・見た？ていうか、見られちゃった・・・

ランは恥ずかしく思いながらも、受け取った。

「後、キイルともお友達になつてくださいね。この村、子供が3人で
大人が5人しかいない小さな村ですから・・・友達が少ないんです・

・

「・・・そうなんだ・・・分かった。いいよ！それより、付き合つてよ
！」

「・・・どこにです？」

「村の人に挨拶！」

ランは、可愛らしい笑みを浮かべた。

「ここが、ケイセツさんの家です。ケイセツさんは、釣り名人なん

ですよ。で、こちらがレスガさんの家です。レスガさんは、一流のガラス職人なんですよ！」

レインは、ランにいろいろなことを教えてくれた。

この村は、いろんな特技を持っている人がいること。
村長さんは、車のコレクターだということや。

いろいろ教えてくれた。

最後に、キイルの家へ来た。

「キイル？います？キイル？」

レインが、ドアをノックする。

返事は無い。

「・・・可笑的い・・・。何でいないのかしら？」

「どこかいつてるんじゃない？」

「ううん。そんなはずは・・・」

「何してんだ？んなところで」

不意に後ろから声がした。

「「えっ？」」

二人は同時に声を上げた。

なんと後ろには、キイルがいた。

キイルは、生意気そうな顔をしている。

「よかったわ。キイル、ラン・・・が挨拶に来ているの」

「あっ、どうも」

ランは後ろを向く。

「・・・どうも。えっと・・・ラン？」

「うん」

ランはそう言つと、軽く会釈をした。

「オマエ・・・前、大木のこと覚えてるか？」

キイルが、突然言い出した。

「大木？・・・ああ、アレのこと？配達の際の」

「そうそう。アレどうやったんだ？」

キイルは真顔で言う。

「・・・やりたい？」

ランは薄く笑いながら聞く。

「もちろん」

キイルも負けずと、薄く笑う。

しばらくコレが続いたあと、突然ランが笑い出した。

「アハハッ！ホントにやりたいんだね！いいよ、教えてあげる！ただし、かなりつらいよ」

「おうっ！平気だ。んなぐらい！」

「OK！じゃ、まずあの木からね！レイン！レインも・・・ありや？」
レインがさっきまでいた場所には、もうレインはいなかった。

「・・・？レイン・・・？」

「アイツ、なんか最近変なんだよね・・・。この前だつて、「引つ越してくるやつが「女」なんだ。どんなやつかな」とか何とかんとか言つてたら、急にいなくなつてたし」

「ふゝん・・・どうしたのかな？」

「いやいや、気づけよ。」

木陰から、お姉さんがツツコンでいた。

それは、「恋」ってヤツでしょ。

「まあっ、いつか。やるぞ」

キイルが声を上げた。

「いいのか分からないけど、オ

良いのか

！！？

ということで、ランとキイルの修行は始まった。

村の奥の公園の、ブランコの上。

キイル・・・キイル・・・とブランコになる。

「ひつく・・・ひつく・・・う・・・」

レインが泣いていた。

ひとり、寂しさの中で。
また・・・わたしの信じれる人が消える・・・。お母さんもお父さん
も・・・皆いなくなる。
ひとりは嫌だよ・・・

ヒトリハイヤ。

サビシイノハイヤ。

ミンナトイツシヨガイイ。

ダカラ・・・ヒトリニシナイデ。

ヒトリハイヤ・・・。

コツンツ・・・。

後ろから足音がした。

「・・・どう・・・しました？」

男の声だ。まだ若い男の声。

「・・・ヒトリハイヤ」

レインは、小さな声で言う。

「そうですか・・・では、何が嫌なんですか？」

「皆がいなくなること。キイルはランに夢中。キイルは運動が好きだから・・・。運動ができるほうが、キイルと一緒にいたいと思う」

「では、その運動のできる子が嫌なんですか？」

「いいえ、ランは大好きよ。まだ、ぜんぜん話したことは無いけど・
・優しい感じがするの・・・」

「では、キイル君の気持ちを操る薬を上げましょうか？」

「えっ？」

レインは、顔をあげる。

気持ちを操る薬？

「これで、ランって子の興味を消してしまえばいいんですよ。話は

しますが、ずっと一緒にいないでしょう。・使いたくなければ、使わないで良いです。使いたければ、付いている紙にサインをしてください。ただ・あなたがどうなろうと、わたしには関係ありませんがね。それではさようなら！」

男は、マントをひるがえし、さっさと歩いていつてしまった。

レインの手には、男から貰った薬が握られていた。

気持ちを操る？

レインの心の中に、この言葉がエコーでよぎる。

「・・・これをつかえば・・・」

レインは、薬を強く握った。

「キイルは・・・」

レインは、薬を見つめた。

その時ほんの微かだが、薬が赤く光った。

あなたの体はわたしがいただきます。

どこからか、さっきの男の声がしたが、レインには聞こえなかった。

予定・嘘・薬（後書き）

こんばんは。

サイキアス力です。

ちよつと、怪しい人物が出てきましたね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4192a/>

しあわせ村 物語

2010年10月20日15時09分発行